

## 令和6年度 富山市科学博物館協議会 議事概要

- 1 日 時 令和6年7月25日（木）午後3時から午後4時35分まで
- 2 場 所 富山市科学博物館・多目的学習室
- 3 出席者 委 員：青木委員、飯田委員、浦畑委員、酒井委員、日吉委員、  
牧野委員、安井委員、山崎委員、吉川委員 計9名  
事務局：浦田科学博物館長、大釜総務課長、林学芸課長、  
坂井主幹学芸員、藤田主幹学芸員、市川主幹学芸員、  
島田総務課主幹、武協総務課副主幹、高畑会計年度任用職員

### 4 内 容

#### (1) あいさつ 浦田科学博物館館長

- ・ 令和5年度を振り返ると1月1日に能登半島地震が発生、富山市でも震度5強を観測した。当館でも外壁の損傷をはじめ、収蔵物の落下等の被害があったが、現在は復旧している。
- ・ 令和2年度以降、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、年間観覧者数は10万人を下回っていたが、新型コロナウイルスが5類へ移行し、行動制限がなくなったことから、令和5年度の年間来館者は開館以来最高となる12万9千人余りとなった。
- ・ 平成19年（2007年）に展示を大幅に更新し、名称を科学文化センターから科学博物館に改めた。それから16年が経過しており、科学系の展示で技術の進歩に伴い更新が必要となっていることから、学識経験者や利用者で構成する「富山市科学博物館展示更新計画検討委員会」を立ち上げ、展示更新計画を策定した。この更新計画は6期から成り、今年度は1期として現在の科学教室、工作教室を、大型モニターを使ったイベントが実施できる「(仮称)サイエンス・ラボ」として改修することとしている。
- ・ 本日は、計画に基づく展示更新も見据え、当館が自然科学の総合博物館として引き続き市民の自然科学への関心や理解を深める役割を担っていけるよう、委員のみなさまの忌憚のないご意見やご助言を賜りたい。

#### (2) 議事

青木会長が議長となり、進められた。

ア. 令和5年度事業報告

イ. 令和6年度事業計画

### 5 主な質疑応答

#### (1) 令和5年度事業報告について

委 員： 入館者数の市内と市外、また県外からの団体等の割合は。

事務局： 資料記載のとおり（団体の児童・生徒は、市内 3,434 人、市内・県外 3,581 人。幼稚園・保育所・認定こども園は、市内 3,530 人、県内市外 1,510 人、県外 0 人。）

委員： 市外だとどの辺りが多いのか。

事務局： 県外だと石川県が多いことは分かっている。

委員： 科学博物館は毎年多様な活動をしていると感じている。そこで 4 点お尋ねしたい。

1 点目は、1 月 1 日に起きた能登半島地震の被害の中に、「ホルマリン流出」と書いてあるが、それがどうなったのか気がかりである。また、保管体制を今後見直す必要があると思うので、その点について聞きたい。

2 点目は、毎年収蔵品が増えているが、収蔵庫は大丈夫なのか。廃棄していくことも必要ではないかと考える。

3 点目は、施設利用について、多目的学習室の利用が 39 回とあるが、その他の日は利用されているのか。

4 点目は科学博物館には 348,000 点の標本があるが、どのように利用されているのか。標本類の貸し出しが 3 件、閲覧が 2 件と書いてあるが、もっと活用する方策はあるのか。

事務局： 1 点目の地震の際のホルマリン流出については、落下したのは作業中の液浸標本であり、量は微量であったので、ふけばよい程度であった。標本自体も被害は少なかった。対策としては、ストッパーが足りない箇所にベルトタイプのものを取り付けたり、棚につっかえ棒を取り付けたりした。

2 点目の収蔵庫の空き状況について、確かに空きは少なくなっているが整理整頓しながら管理している。多くはないが、一部廃棄しているものもある。

3 点目の部屋の活用状況で、多目的学習室の利用については、資料にはイベント利用や貸館として使用したものは書いてあるが、イベント以外の会合や作業で毎日のように使っている。

4 点目の標本の貸し出し・閲覧については、正式に書類を作成したもののみを掲載しており、実際はもっと多くの方に見ていただいている。ちなみに、天文分野の貸し出しに関しては、流星刀と白萩隕鉄第 2 号を京都大学総合博物館に現在貸し出している。

天文分野以外の標本の貸し出しについては、ホルマリンが入っている液浸標本については持ち運ぶに不適なので普及用としては使用していない。植物の押し葉標本については、色が褪せているものもあって一般の方には見分けるのが困難なので、研究者向けである。化石標本についても同様である。分かりやすいものは、「移動ミニ博物館」として積極的に PR している。

会長： 地震の被害については、軽微であってよかった。揺れの大きかった珠洲市では、つっかえ棒があっても壊れていた。どこまで対策をするかは難しいところだが、安全管理だけはしっかりとやっていただきたい。

あと、バックヤードが少ない博物館は物足りないと思う。資料が増えている要因の一つとして、富山大学の教員がリタイヤした際に鉱物などの資料を

引き取ってもらっているからではないか。

事務局： その中には、貴重な「シャッターコーン」があり、有難かった。

会長： 大学の教員がリタイヤして、貴重な資料を捨てているということが全国的にはあるので、それを見つけるということもよいのではないか。

委員： 科学博物館の入館者数を見るとコロナ前よりかなり増加している。全国の施設ではコロナ前の6～7割の回復で喜んでいる状況だが、これだけ増加した要因は何か。また、入館者の中でインバウンドの利用状況はどうか。富山駅前もインバウンドが増えているので、科学博物館でも富山を見せるとか、日本の自然の典型を見せるという意味で力を入れていただきたい。

事務局： 3月にプラネタリウム更新をしたので、4・5月の入館者が多かったと考えている。インバウンドは統計をとっていないが、それほど多くはない状況である。外国から来られた方にも来ていただけるように、PRしていきたい。

委員： ぜひそういう役割を果たして行ってほしい。あと、能登半島地震の後の科学博物館の対応が非常に速やかであったと感じている。速報の展示や講演会を行っており、市民参加の被害調査も行っている。そういう迅速な対応ができた一番の要因は何か。

事務局： 地質担当の学芸員が速やかに、ロビー展示として地震の被害状況プロジェクトを企画して被害状況を書いてもらった。震度分布図をじっくり見る人や被害状況を書く人も多く、地震への関心の高さを改めて感じた。講演会については「友の会」から要望をいただいて実施したものであり、講師は地質担当の学芸員の人脈で選んだ。

委員： すばらしい人材をかかえておられるので、何かあったら今回のような迅速な対応をまたお願いしたい。

一方、今年度は立山カルデラ砂防博物館と共同企画展を開催していただいたので大変助かっている。科学博物館の収蔵物を活用させていただいたことは効果があった。科学博物館は富山の科学系の博物館としてリーダーシップの役割を担っているので、今後も収蔵物を他の施設に提供していただけるような仕組みを考えていただきたい。

会長： インバウンドに対して、どのような対応をしていくのか。立山カルデラ砂防博物館は大変だと思う。

委員： 立山カルデラ砂防博物館の場合、連休中の7～8割はインバウンドなので、3か国対応をやらざるを得ない状況である。

事務局： 科学博物館の展示はまだ対応していない。パンフレットは外国語のものを用意している。それを見ればどこにどんな展示があるか分かるようにしている。展示更新でどこまで対応していくかが課題であるが、スマホをかざす時代になってきている。

委員： QRコードで対応する方法に変わっていることも考えてほしい。

会長： 今回の地震で迅速に動いたのは、地質担当の学芸員が地元の大学を卒業して、地元のことをよく分かっていたからだと思う。

委員： 友の会の総会は1月にあり、その時の話題は地震であった。そこで、地震

について話を聞きたいという意見が多かったので講演会を開いた。友の会は博物館の応援団という立場であり、今後も支援をしていきたい。

話は変わるが、資料に書いてある「知的レクリエーション」の場とはどういうことなのか。また、収蔵品を小中学校に持っていくという活動について説明していただきたい。

事務局： 「知的レクリエーション」とは、展示を見ていただいたり、体験装置で遊んでもらったりして楽しいと感じてもらうことである。それによって、自然や科学を好きになってもらうことをイメージしているものである。

学校への貸し出しについては「移動ミニ博物館」として、現在45セットを用意して県内の小中学校に貸し出し、好評を得ている。また、学芸員が直接学校に行くことは時間的に難しいので、オンラインによる授業参加も行っている。

委員： 所蔵標本の活用という点では、すでに公開データベースになっているので、インターネット上での活用もできる。今後は、活用する方法を教えるのもよいのではないかと。例えば自由研究などで富山の生物が日本のどこにいるのかといった調べ方ができるのではないかと。情報を活用する体制を整える方法もあるのではないかと。

事務局： 写真は画像データベースで公開しているが、活用方法についてはこれから検討していきたい。

## (2) 令和6年度事業計画について

委員： 展示更新が、今年度から順調にスタートしているということは喜ばしい。第6期に観察ドームを作る計画があるが、天文台がなくなったことで、天文に関するニーズも多いので、どこかの段階で練り上げてもらったらよいのではないかと考えている。あと、観覧者数の中に、オーバードホールとの連携の人数は入っているのか。

事務局： オーバードホールとの連携については、オーバードホール主催なので、その人数は入っていない。7月にライブを行ったが、チケットは完売していたので、約170名プラスになる。

天体観測施設については、近代美術館の建物との兼ね合いや地元の要望などを勘案し、方向性を見ていく必要がある。もし計画を早めるならば、もう一度市全体で協議をする必要がある。

会長： 天体観測施設の完成が6年後というのと、現在小学校1年生のこどもは小学校を卒業してしまう。市民からの要望が強くないと無理だし、財政の面があるのでなかなか難しいところである。学校の方からも声をかけていただけたらと個人的には思う。土星を実際に見るだけでもこどもたちの将来が変わってくる可能性がある。とにかくこどもたちがわくわくする環境をつくっていただけたらと思う。

委員： 展示更新については、計画がしっかり固められているのでよい。今ある展示の中にはよい展示があるので、全部壊すのではなく、生かせるものは生かしてほしい。ダイヤモンドダストや強風体験の場がなくなってしまう

のではないかと思っていた。また、特別展で展示した装置のよいところを生かしながら展示更新を行っていただきたい。

事務局： 今のところ、ダイヤモンドダストは存続する予定である。ただし機械が古くなっているので取り替える必要がある。展示は全面的に変えるのではなく、資料の中の丸で囲んでいる所は主に替えるという意味である。また、パネルを替え、伝え方も替え、さらに新しく分かったことを取り入れながら進めていきたい。さらに特別展で出した装置を研究しつつ、新しい展示に生かしていきたいと考えている。

委員： 展示計画の資料を見ると、「体験を増やす」「田んぼの中が見られる」、そして「今までできなかった科学実験が見られる」などの文言がたくさん書いてあってよい。展示物をたくさん見ることも楽しいが、読み取ることが難しい小学校のこどもたちにとっては、「実物を見る」「体験をする」ことがよりわくわくすることにつながる。体験が増えるということで楽しみにしている。

事務局： 科学博物館のよいところは、「実物がある」「体験ができる」ことである。映像や音声だけならネットでいくらでも見られるし、解説だけならばAIやユーチューブ動画などの方がよく分かる時代である。実物を見て、画面を見るだけでは感じられない質感を感じることによって、こどもたちの好奇心や積極性が高まっていく。体験をしたり、実物を見たりする場を提供していきたいと思っている。

会長： 展示更新会議の中でも、科学博物館は本物を見せることを第一にして話を進めていた。

委員： 自分はアメリカの日本人学校で3年間勤務していた経験があるが、その時、自然史博物館のパスポートを買って通っていた。「体験」「見てわかる」「言葉がなくても分かる」がコンセプトになっていたので、英語が分からない自分の子供でも博物館が大好きであった。ぜひそのコンセプトを取り入れて行っていただきたい。インターネットでは分からない本物のよさや、触って体験できることの楽しさを伝えていただきたい。

もう一点、アメリカの自然史博物館には、始祖鳥の化石が展示されていた。展示の目玉があると人は集まるので、予算的に難しいが小中学生の誰もが知っているような有名な化石や展示物があればいいと思う。

事務局： 展示更新計画に載っているもの以外を取り入れると簡単に言える状況ではないが、参考にしていきたい。

委員： 今日親の立場として話す。先日、富山市教育委員会と話をした際、こどもは最初つまらないと思うとそっぽを向いてしまうということが話題になっていた。その意味で、新しいことを知るのはおもしろいということを経験するには、科学博物館はよいところである。

様々なかたちで科学博物館がPRをしていることは理解しているが、誘導する場所がホームページだけでなく、直接リンクにとべるとか、必ずQRコードが付いている状況であれば、もう少し親に知ってもらえるのではないと思う。例えば、この重力展のチラシはどこで手に入るのか。

事務局： 重力展のチラシは、市内の全小学校の児童に配付している。

委員： こどもにペーパーで渡したとしても親の目には入らないこともあるので、大人が必ず目にする方法があればよい。科学博物館に興味がある保護者は勝手に調べるが、興味が少ない保護者に知らせる方法があればよい。結局、親が科学博物館にこどもを連れてくることになるので、お金をかけないで大人が目にする方法があればよいと思う。

事務局： 市の公式 LINE に入ればイベントの案内やお知らせが、スマホに届くようになっている。その他、市の広報に載せたり、ポスターを地区センターに配ったりしている。

なお、学校で使っているアプリの「tetoru」については、緊急時のみの情報発信をしているということなので、当館のイベント情報を載せるのは難しい。重力展のチラシは、市内の全小学校の児童に配付している。

会長： 厳しい言い方をすれば、科学博物館の露出度が少ないのではないかと感じる。富山空港を降りると美術館のポスターは目に入るが、最近街中を歩いていても科学博物館の案内は少ない。今の時代に合った、お金をかけない広報の在り方を変えていくのもよい。

※ 発言内容を一部整理しております。